

ども、岩子は、自分より苦しい生活のようすを見て、救いの手をさしのべずにはいられませんでした。翌日から、行商ぎやうしやうに出るたびに、その子供の家をまわり、母親の看病かんびやうから食事の世話をし、時にはお金を与えたりもしました。

そんな岩子に追いうちをかけるように、不幸が続きました。安政四年（一八五七年）に今まで世話をうけていた叔父が、文久二年（一八六二年）には夫が、文久三年（一八六三年）には母が、つぎつぎとなくなってしまったのです。

岩子一家は悲しみの中、会津若松の城下町を去り、熱塩の山形屋に移り住みました。そして、毎日のように近くのお寺、示現寺じげんじにお参りし、不運なできごとをなげいていました。

こんな岩子に、これからの生き方を教えてくれたのは、お参りにいっていた示現寺のおしょうさんでした。

「あなたは、自分の不幸に悲しみ、仏さまにおすがりしようとしているが、あ